

● 建学連第4回総会記念講演 ● 建築学生連絡会主催
1972年12月10日に東京大学(駒場)
(「ある建築学生の群像 建築学生連絡会10年史」p74～
p77に掲載)

建築学生は何を学ぶべきか

R I A 建築総合研究所 山口文象

私は建築の仕事始めて、52～3年になります。私達の世代は、前川国男だとか、おとし亡くなられた板倉準三だとか、近頃はいろいろおかしい建築しか設計しませんが、谷口吉郎だとかという連中です。彼らは、東京帝国大学を出したので建築家として世に出たのは、私よりも5～6年後です。

私は昔の高等学校も大学も経験していません。小僧として建築界に飛込んだ訳です。その当時、絵を描いてみたり、詩や小説を書いてみたりしていたので大分迷ったのですが、親父が大工だったので自然にこの道に進んだのです。

私が建築を始めた当時は、いわゆる近代建築というものに人々は注目をしませんし、大変反対されました。また、デザインによって給料が貰えるような時代ではなかったのです。現在、振り返って今日の日本のいわゆる近代建築の隆盛を見ると、本当に夢のようです。

私は昔から「技術」ということを考えていました。昔、唯物一研究会というのがありまして、その中に分科会としても存在していました。

ヘーゲルは「労働というものは、労働になる前と、そして労働の後、それを総合したものの中で、その利益の価値ということが決定される」というようなことを書いています。ですから、全体をいわゆるヘーゲル的にいえば、弁証法的にその技術なりを考えなければならず、技術だけ抽象して考えていては誤ってしまう、というように書いています。すなわち、技術というものは、それだけで考えてはいけません。前後・左右をよく見て、グローバルな物の考え方をしなければならぬということです。弁証法的に物を考えるということです。

第一次世界大戦が終わった頃、ワイマールのバウハウスがで、近代建築の草分けの時代でした。その時期に私は建築を始めました。私の友人たちが大学を出て建築に携わろうとした時代、その時代は、有名な言葉で「住宅は住む機械である」もみられるように、近代建築というものは、機能主義でなければいけない、と考えられていたのです。

しかし、日本人の悪い癖で、とにかくヨーロッパでやっているのだから正しいという、明治天皇以来の輸入的精神が伝統としてありました。輸入の仕方というか、模倣性といえますか、そういうものになびいていたわけです。そして、それが日本の伝統として流れていきました。

しかし、私は当時、唯物論研究会で、マルクスの資本論だとか、ヘーゲルの弁証論だとかをドイツ語で勉強していまし

て、とても私一人では読めるものではなかったけれども、そういうドイツ語の勉強のサークルで、そういう本をとりあげ勉強していたことが非常に幸いして、輸入の仕方に疑問を持ったのです。その点で私も、私の思想形成から考えますと、あの時代が一番重要だったと思います。

私達がやっていた創字社建築会というものがありました。その時の私の講演の主題は「合理主義反省の要望」ということでした。大変どうも、もってまわった題なのですが、つまり合理主義、いわゆるフンクショナルリズムというもののだけでなく、それをもっと歴

史的に哲学的に考えてやっていかないと、合理主義はとんでもない方向に行くのではないかという疑問をもち、再度、建築家達は反省しなければならないのではないかということ話を話したのです。

「合理主義反省の要望」などという、偉そうな題がついていますが、今読んでみると本当|こ首も寒いし、汗をかくような、まことに恥ずかしいことを言っています。それは表現の仕方が悪いのですが、今考えてみますと、よくぞあの時代に、ああいうことを言ったものだと思に恐ろしい思いがします。

今の近代建築を考えてみますと、再度考えなおす必要があると思います。格好のいい近代建築ができてきています。今皆さんが尊敬し、傾倒していると思いますが、磯崎新などという天才が現われまして、建築を九州に建てています。それから、大高正人をはじめとして、これは良いか悪いか解りませんが、黒川紀章という建築家は置物のような建築をつくっています。

ピークの3人をあげましたが、私は別に悪口を言っているのではなく、この傾向は冰山の一角であると言っているのです。全ての建築家が現在、この方向に傾きつつあります。建築雑誌には、格好のいい建築物ばかり並んでいますが、どうしてこのような建築がせきなのか？ そして建築家は何をすべきなのか？ 何を考えるべきなのか？ ということは指摘されていません。

何に関しても自分の考え方というものがあり、重心がそこになければ、どんな方向に飛んでいくか解りません。皆さんは、どんな仕事をするにしても、その重心を忘れてはいけません。これを忘れていては日本の建築はこんな状態になってしまったのです。

私は別に磯崎君を悪く言うつもりはありません。ただ彼は自分自身の仕事を追求しています。ところが、「新建築」や「SD」等の雑誌などにより、頭をおさえられて汁事をしている人々のことを心配しているわけです。ですから何に限らず悪いのは、ただ重心がなく軽くスッて行ってしまう人が非常に多いということです。全てのものがそうになってきている。残念なことです。

私が唯物論研究会で技術について考えていた時、私をいろいろな意味において引っばってくれたのが三枝博音先生で

す。私が尊敬する親父のような人です。先生は日本でヘーゲル哲学を正統的に確立した人です。三枝博音先生は、1963年の国鉄の衝突事故で亡くなりました。当時、横浜市立大学の学長でそして、科学史学会の会長でした。

先生が亡くなって数年後、私達は先生の論文などを3冊ほど中央公論社から、そして著作集などを出版しました。これは建築には関係ありませんが、紹介しますと、先生は日本には哲学はないということをずっと言われていました。

徳川中期に、三浦梅園という人がいました。彼については岩波文庫に紹介されています。先生は、三浦梅園の中に唯物論的弁証法なるものを見つけ発展させました。その時の先生の情熱は大変なものでした。また先生によって、我々の祖先のことを考えてみると、民族的にはではなく、日本人が他と較べると立派な仕事をしてきており、これを技術史の上で見るということを気づかされました。

三枝博音先生の技術と技術史というものは立派なものです。そこで我々は建築と関係したものをやってみようと思いました。しかし、目次を並べ、骨組を並べ岩波出版と相談して、先生と私が書くとしてから約半年で先生が亡くなりました。私は仕事という意味においてではなく、先生としての先生が亡くなったので本当に落胆しました。私は、友人や先輩というのはどんなに大切であるのかということを真剣に考えました。人にとって一番大切なのは友人でオ。しかも、心と心で自ずと結ばれた友人は大切なのです。

- 以下 中略 - (山口文象先生が黒板を利用してお話しになられた為、文章化する事が出来ず省略させていただきます。・お話しの内容は要約すると、四国の瀬戸内海側の貯水池の造り方の知恵とでき上がったものの美しさ。福井にある小さな屋の建築的構造の解決法。同じ福井の城の石垣の積み方。鳥居や五重塔が耐震構造になっていること。以上を例に、我々の先輩達がどんな大変な仕事を残してきたかを話され、私達は、デザインの上からだけで建築史を見るのではなく私達の祖先がいかに技術的に、科学的に、合理的に、物を考えていったかということを経験の中で習わなくてはならないという事でした。)

みなさんは、建築の構造をおやりになるのか？ あるいは現場の方・施工の方をおやりになるのか？ あるいはデザインをして丹下さんのような建築家になるのか？ それは私には分かりませんけれど、とにかく、そのあらゆる建築の分野において働かなければならない皆さんというのは、どういう事を考えたらいいのか、また、どういう職場が待っているのか、そういう事を良く考えていただきたいと居うのです。

まず、時間的な前後はともかくとして、技術なり、学問なりというのと平行して、人間とはどういうものであるか。社会はどういうふうになっているか。また、どういう方向へ進むのか。現時点で我々が、又皆さんがどこにいるのか。この世界史的な意味において、皆さんの位置はどこなのか、という事をよく考えなければいけません。そういう事を考えない

と、技術はすばらしいのだけれどその使い方を誤ってしまう結果になってしまうのです。

私はもう70才ですので、せいぜい生きて5～6年だから、後はもう野となれ山となれで、皆さんが、どのくらい苦しい、苦しまれるか、そんな事どうだってかまわないけれど、人間というものを良く考えてみますと、自分が現時点にここに居るのは、つまり過去が充実していて、そしてまたこれから明日なり、未来という接点と、自分達がここに居るんだということをはっきり認識してもらいたい。そういうことなんです。

今、やらなくてはならないことは、いろいろな専門の分野がありますが、これからの若いみなさんは、この日本の住宅問題を抜きにしては考えられない。建築家として一番やらなくてはならないのが、この住宅問題だと思うわけです。

この住宅問題が今どういうふうになっているかを考えますと、政府は何もやらないし、住宅公団ではまるでカピの生えた仕事しかしていない。ボヤボヤしているうちに土地がどんどん上っていく。そして大資本がどんどん土地を買い上げていき、日本を買い占める日も間近です。日本は全部、金持ちの日本になってしまうのです。例えば、琵琶湖の付近は西武鉄道、千葉のどこかは三井不動産、もう全部そういうふうで、我々の生きる所がない。そういう事ではいけません。

それを黙って見ている政治というもの、国民のだらしなさというもの、こういうものを自覚めさせ、そしてアピールして、我々建築学生が何かをプラスしていかななくてはならない。本当の最悪の事態に住宅問題は追い込まれてきています。

プランニングを考えると、それも必要かもしれませんが、基礎となるべき地面が土地がうばわれつつある。地面がなくなってしまっている。我々の仕事というのは全部、均面の上にこしらえるものですから、その地面がなくなったら我々の仕事がなくなります。人間も生活できなくなる。一番重大な問題を今なおざりにしているわけです。

公害のことも大変です。建築家にも責任がありますけれども、まず第一、これからの運動としては、学生の運動、みんな手を握って何か社会にアピールするには住宅を中心にした学生運動、もうこれ以外ない。大学内で学部長をつるし上げるのもけっこうですけども、まずその前に、ガアガアさわがないで静かにこの住宅問題をじっくり考えてみる。みなさんの力で何かこの一般の人達の為の運動アピール、こういうものがいいと思うのです。

本当に今、みなさんはまだおやじのスネをかじっているから痛切には感じていないだろうと思いますけれど、私は、考えるともう本当に夜に目が覚めて眠られなくなってくる。いろいろな事を考える。まず非常に恐い、本当に震えが止まらないくらい恐い。これは誇張じゃありません。それくらい我々は追い込まれている。

建築家は、かっこうのいい、デラックスな建築を作る前に、それが必要ですが、それはもう物資が足りて、住宅が足りて、

その時にはじめていいのであって、今そういうことをしている時代ではない。

日本全国に今、2百幾つという公民館・公会堂・アッセンブリーなホールができておりますけれども。全部ろくでもない建築ばかりです。芝居もろくにできない、音楽も、オーケストラもできない、できるのは政権演説だけで、「お願いいたします」という政権演説の時間だけしかないのです。そんなもの、いくらかっこう良く作ったって、その公会堂のまわりだけが非常にきれいで、泥がなくてペープメントしてある。だが、ちょっと出るっていうと、どろ。こんな日本の文化ありますか。

そんなものよりも我々は、本当に、1人1つの部屋があって、ゆっくり勉強でできて人間自身を考えることができる、そういう住宅を作りたい。私は年寄りですからね。あんた達、どんなふうでもかまわない。しかしこれは基本的に人間として、人間を考える時に建築家がやらなければならない重大な課題だと思うのです。住宅問題も、もちろんそういうふうに重大です。

この間、ある年寄りの建築家が、日本で最高の文化勲章、かなんか知りませんが、もらいましたね。建築家ですね、知ってますか。そうそう、内田祥三先生ね。内田祥三先生が、本日、現代、今日この日本で最高の勲章をもらってる。建築界としては、本当に名誉であるかもしれません。

しかし、よく考えてみますと、日本の恐しさというもののひとつの象徴だと思うんです。戦争中に、つまり、日本の東条英機と協力して、いろいろな建築活動をし、それに賛成してやてきた、そういう建築家がたくさんおります。今でも日本に沢山いますね。その建築家達が、8月の15日以後どうしたかと言いますと、全部建築のデモクラシーの民主主義の運動に鞍替えいたしましたして、社会は民主主義でなければいけない、近代建築も民主主義でなければいけない、なんでもかんでも民主主義で、共産党あるいは社会党に協力をする。

これに対して、ヨーロッパではすばらしい。きびしい質問、詰問をいたしまして、いわゆる戦犯を除外しております。で、彼らは、フランスでもそうですけれども、大変なレジスタンスに命をかけてやってまいりました。だから戦争に、少しでも協力した者は、社会からあらゆる方面においてほうむり去られております。きびしい審判をしております。

日本はどうですか。戦争中にそういうことをした人達が、8月15日にもう全部転向いたしましたして、エヘラエヘラ笑いながら、近代建築を作っています。それをだれもなんとも言わない。そうして今度は、その象徴として、この間、内田祥三先生が表彰されました。最大の表彰をもらいました。

これは、建築界としては、りっぱなことかもしれません。しかし、日本の一番悪い象徴だと思います。内田先生は戦争中は、帝国大学の総長をしていました。日本の優秀な先生は、東大あるいは全国の大学の総長をしていました。日本の優秀な学生、東大あるいは全国の大学の学徒出陣の先頭に

立って、旗を振ったのは内田祥三ですよ。

そういう世の中です、日本は。なんと危険なことにございましょう。政治的にも軍事的にも今、非常にむずかしいところへ日本は来ているわけです。そういう時に、何の気なしに誰も知らないだろうと忘れちゃっただろうと、こっそりと内田先生が出て来てるわけです。これについて、日本の建築の評論家どもは、何も言わんのですよ。日本のジャーナリズムは何も言わんのです。なおかつ、建築界では、内田先生の賞をもらったお祝いのパーティーをでかでかとまことに盛んにやりました。私は欠席いたしました。

そういう。先程お話しいたしましたように、技術とか芸術とか、そういうものとは別に、つまりそういうものをクリエーションする人間、その人間のおへそのまわりの重さですよ。この重心がだらしがないから、そういうことになっていくわけです。こういうことは、た

いへんに重大なことです。ここで、みなさんがよくものを考えないと、そうなるわけです。いつのまにか流されて、その流されたイカダの上にみんないるわけです。まことに危険なことです。

同かの畏によって時代の流れがかわった時に、みんながそっちへバツと行くわけです。考えない輩です。考えない輩は、風が吹けばそれにまかされ、なびいていく柳ですよ。これでは困る。格好のいい建築をつくる前に、まず人間かどうということを望み、やるべきか、人間とは何なのか、この思想構造をきっちりとかみ上げることが建築家である前に、建築科の学生である前に、あるいはそれと同時に、そのことをじっくりと考えなければならない

日本の建築家は、りっぱな建築技術をもっている。しかしそういうことに無関心のようにみえる。関心を持っているけれども、なにか言うとかぶないから、商売に関係があるから言わない。

この話は、録音してありますので、おそらく、何かのひょうしでこれが公になるだろうと思います。私は公になってもかまいません。

という意味で、これからみなさんは建築をやる場合、どのようなことをするにも、人間の姿勢というものが大事だということ、これを私は強調しておきたい。